

大野山林の野鳥を守りたい～インドクジャクは野鳥の敵なのか？～

「宮古自然クラブ」 宮古島市立北中学校 2 年 平良 航大

宮古島市立平良中学校 2 年 親泊 千明

1. 動機・目的

四歳の頃から観察会に参加して、多くの時間を大野山林で過ごしてきた。大野山林にはたくさんの生き物がいて、とてもおもしろい。特に野鳥のさえずりや美しい姿は魅力的で夢中になって探し、見つけると見ているだけで癒された。去年から、野鳥についての調査を始めた。記録をとって観察をしているが、去年と今年を比べただけでも、野鳥が減りインドクジャクがとて増えていると感じている。インドクジャクが増えると、野鳥がどんどん減っていくのでは？と不安になった。

大野山林の生き物全体の変化を知り、特に気になっているインドクジャクが大野山林の野鳥や周辺の農家にどんな影響を与えているか明らかにしたい。

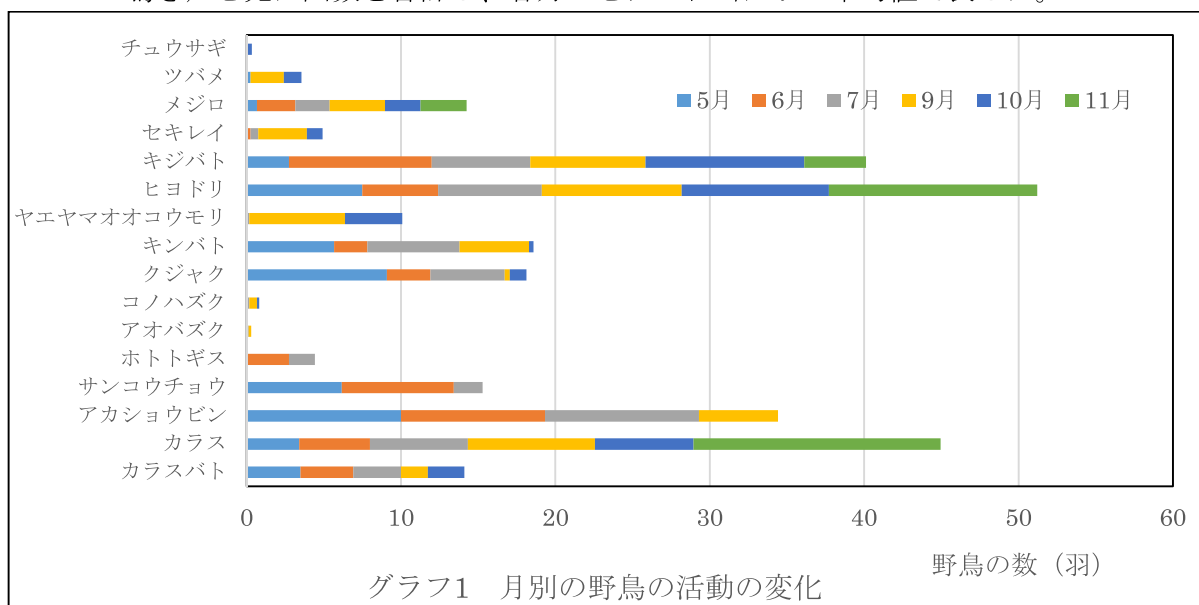
私達が山林で過ごしたかけがえのない時間を、これから子どもたちにも同じように体験してほしい。そのために大野山林の生き物を調べ、守る方法を考えていきたい。

2. 方法・内容

- (1) 野鳥の生息状況を調べるために、大野山林で野鳥の鳴き声と見えた鳥の回数を定点観察する。週末に、日の出の時間から 30 分間目視した個体の数と鳴き声の回数を種類ごとに記録する。(2 地点にて)
- (2) 大野山林を散策し、どんな生き物がいるのかを調査する。
- (3) 現在の宮古島におけるインドクジャク（以下クジャクと表記）について行政機関、猟友会、農家などの地域住民から情報を収集する。大野山林周辺の家を回って、クジャクを目撃情報、その他クジャクについてわかることなどを聞き取り調査する。
- (4) 録音機を使って大野山林内のクジャクの生息数や生息域を調査する。
- (5) クジャクの食べ物を知るために胃の内容物を調べる。

3. 調査結果

- (1) 野鳥の定点観察結果をグラフ 1 に表す。大野山林内の 100m 離れた 2 点での観測結果の鳴き声と見た回数を合計し、各月ごとに一日当たりの平均値で表した。



定点観測をすることで、クジャクのように繁殖期によく鳴く鳥、アカショウビンのような渡り鳥がいることが確認できる。

- (2) 大野山林で見られた生き物を食物連鎖の関係で図1に表した。ピラミットの頂点には、大野山林の中で体が大きく数多くいて、ほかの生き物に影響が大きいと思われるものである。

イヌ、ネコ、カラス、クジャク、イタチ

図1 大野山林内の食物連鎖
(赤字は外来種)

鳥類：メジロ、サンコウチョウ、アカショウビン、キンバト、カラスバト、ヒヨドリ、ホトトギス、ヤエヤマオオコウモリ、キジバト、アオバズク、コノハズク、セキレイ、ズアカアオバト、オオクイナ、セッカ

小動物：ネズミ、シロアゴガエル、サキシマスジロ、ヒメアマガエル、ミヤコヒキガエル、ミヤコヒバア、キシノウエトカゲ、ミヤコカナヘビ、セマルハコガメ、イシガメミシシッピアカミミガメ、ネクラヘビ、クマネズミ

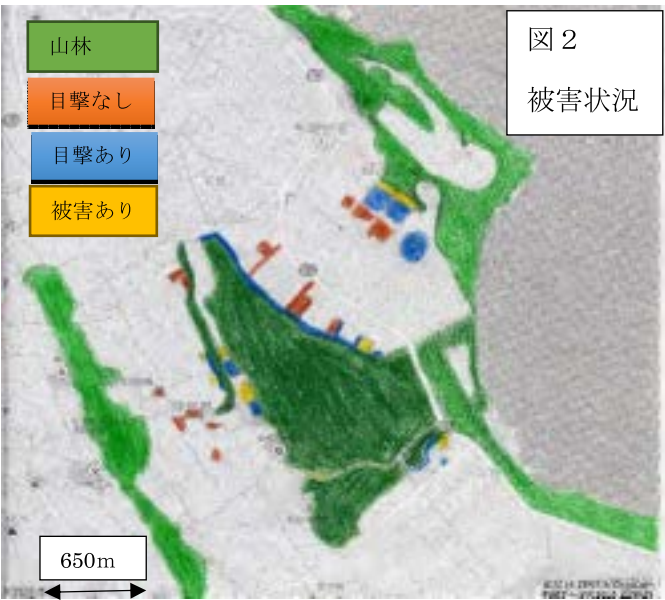
昆虫類：マダラコオロギ、カマキリ、バッタ、クモ、ホタル、アフリカマイマイ、ヒラクワガタ、ミヤコニイニイ、クマゼミ、イワサキクサゼミ

植物類：クワズイモ、ホテイアオイ、宮古ぜんまい、イヌマキ、オオタニワタリ、ガジュマル、アカギ、テリハボク、オオタニワタリ、クロトン、アダン、ゲットウ、リュウキュウマツ、モクマオウ、ホシダ、キンネム、オキナワスズメウリ、フクギ、アカギ、タブのキ、ボタンキクサ、アメリカハマグルマ、アメリカセンダングサ

(3) 聞き取り調査結果

- ① 市役所の農政課では、クジャクの駆除数などを教えてもらった。平成19年から駆除を開始し、平成27年度までには1113羽(年平均約130匹)を駆除したと報告があった。駆除は、野菜農家からの苦情に対応して県の費用で行っている。
- ② 市役所のみどり推進課では、クジャクの駆除の様子を教えてもらった。駆除した数は、鶏冠の部分で数を数えている。これまで、みどり推進課が駆除を担当していたが28年度から農政課に担当が変わったので最近の情報は持っていない。
- ③ 宮古島のクジャクの駆除を担当している猟友会の会長さんに、駆除の現状を教えてもらった。実際の駆除数は、市役所からの情報よりも多く、毎年200羽以上である。池間島、来間島、多良間島には生息していないが、クジャクの生息範囲は宮古全域に広がっている。伊良部島にも生息していて、伊良部島のクジャクも駆除をしている。最近では、主に友利から北海岸に向かっての一周道路から、崖下の木に止まっているクジャクを駆除している。クジャクが生息している海岸沿いの崖は人が入れないような場所なので、猟銃による駆除では、絶滅させるのは難しい。
大野山林での駆除は、4、5年前にやったが最近では行っていない。大野山林内には保健所が野犬のわなを仕掛けているが、クジャクはそのわなにはかからない。現在は、竹富町で探査犬を使ってクジャクの卵を駆除しているが、宮古島ではまだ導入していない。クジャクの体重は、メスは平均2kg、オスは5~7kg。
- ④ 大野山林周辺農家への聞き取り調査の結果(約30軒) 図2参照
 - ・平成7年から姿が見られるようになった
 - ・路地栽培では被害にあっているがビニールハウス栽培では、被害が出ていない
 - ・エンサイ、サトウキビへの被害はない
 - ・カボチャについての被害は、発芽した芽、育った苗の新芽や花芽を食べる。
実った小さい柔らかい実を突く、足踏んで傷つけなどである。
 - ・福山のピンフ岳周辺では10年前からクジャクが現れ、5年ほど前までは林に面した畑のカボチャやナンコウの被害がひどかったが、今年はまだ被害にあっていない。
 - ・以前まで被害があった農家のほとんどが今は被害にあっていない。

- ・クジャクの姿が見えるのは山林から 100 m 以内の道や畑
 - ・繁殖期は、周辺のキビ畑までクジャクの声が聞こえるが、夏以降は森の中でしか声を聞くことができない。
 - ・山林に面した民家の庭にも羽が落ちていた。
 - ・葉野菜農家では、アブラナ科の新芽や葉、ブラジルスベリヒユも食べられた
- ⑤ 大阪市立大学の野鳥の研究をする大学院生からの聞き取り結果
- ・アカショウビンの体重は、約 100 g。食べ物は、2 割がカマキリなどの昆虫類、4 割が両生類、爬虫類、4 割がネズミ、カニ、鳥のヒナ。
 - ・キンバトの体重は、約 120 g。食べ物は、クワズイモの実、オタマジャクシ
 - ・サンコウチョウの体重は、約 18 グラム。食べ物は、蝶の幼虫、マダラコオロギ



(4)録音調査の結果

クジャクが目撃された場所（聞き取り調査より）で、大野山林からの距離を決め（0 m、150 m、300 m）日没前後 30 分間録音機を設置した。だが、繁殖期（2 月～6 月）を過ぎていたため鳴き声がほとんど録音されず生息数や生息域を推測することはできなかった。

(5) 胃の内容物を調べた結果

宮古島の猟友会の方に同行して、クジャクを駆除する現場を見た。二回（平成 28 年 10 月 23 日と 11 月 19 日）に分けて城辺の吉野部落で計 3 匹のメスのクジャクを駆除することができた。本当は大野山林内のクジャクを駆除する予定だったが、山林内に多くの人が入っているため銃を発砲するのは危険ということから、今回は城辺の個体で調査した。駆除したクジャク 3 匹は、胃と砂肝だけを摘出し、アルコールに浸して消毒した後、胃袋と砂肝を解剖用はさみで切り開き内容物を調べた。

内容物	メス1(2kg)	メス(1.5kg)	メス3(1.5kg)
トウガラシの断片	1 個		
なんこうの実	9 個		
球根(約 1 cm)	20 個		
黒色の種	27 粒		
イネ科の植物の種子	150 粒	12 個	150 粒
葉	3 片	38 片	81 枚
オキナワスズメウリ		5 個	8 個
クモ(体長 1 cm)		1 匹	
昆虫の足		1 本	
クロトン		5 片	40 片
イヌビワ		36 粒	38 粒
ギンネムの種		2 粒	5 粒

表 1 クジャクの胃の内容物 ※葉は断片（1 c m 以上）だけでも 1 片と数えた。

クジャクは昆虫や爬虫類を中心に食べていると予想していたが、今回の個体は実や種、葉などの中心だった。また、捕獲した場所によって食べている植物の種類が違っていった。

4. 考察

定点観察により5月から9月までは野鳥の種類が多かったが、10月以降は段々と減っていくことがわかった。

クジャクの駆除に同行したことや聞き取り調査から、クジャクの生息域が宮古島の写真の緑の全域に広がっていることを知ることができた。



また城辺の畑では、まだ被害があるものの、大野山林周辺では被害がなくなっていることがわかった。野菜農家の方々が周辺で路地栽培しなくなったことやビニールハウスを利用する農家が増えたことが原因だと思われる。

インターネットで調べたところ小浜島では、絶滅危惧種のトカゲなどを捕食しているとの情報があったので、絶滅危惧種のミヤコカナヘビなどもクジャクに捕食されたのではと仮説を立てたが、胃の内容物を調べても植物中心だったので仮説は立証されなかった。だが、大野山林に生息しているクジャクではなかったことや、栄養が必要な繁殖期ではなかったこと、3匹ともメスだったことなども関係しているのかもしれないので引き続き調査して、捕食された可能性があるのかを調べたいと思う。

ほかの鳥類に及ぼす影響については、食べ物が同じである場合、体の大きなクジャクがサンコウチョウやアカショウビンなどに影響しているのではないかと考えていたが、大野山林のクジャクの胃を調べていないので、まだ明らかにできていない。しかし、もしも仮説が正しくて、食べ物が同じ場合、体重で比較するとクジャクのオス1匹でサンコウチョウ330匹分、メス1匹で、110匹分のエサが食べられていることになるので、影響は大きいと予測される。

駆除現場を見て、撃たれた瞬間、もがく様子を見て、とても悲しくなった。たとえ、外来種であっても命を簡単に奪うのはいけないのではないかと思った。クジャクは元々小学校やリゾートホテルが飼っていて、逃がしてしまったことが原因で増えたことが、博物館の文献により分かったので、人間が責任を持った行動をとるべきだと感じた。

そして、もしクジャクが害を及ぼしていないのであれば駆除をする必要はないと考えたので継続して研究していきたいと思う。だが、害を及ぼしていると分かった場合は全滅してほしい。人だけでは、駆除をすることが困難なので、竹富町のように探査犬を導入する必要があると思う。だが、宮古島の場合、海岸沿いの崖になっている部分に繁殖しているため竹富町と全く同じ方法では駆除は難しいと思う。宮古島特有の駆除方法を考えていく必要がある。今後の課題として、これまでの調査を継続し、1年間を通しての野鳥の活動の変化とクジャクとの関係を調べていきたい。

5. 参考文献 小浜島におけるインドクジャクの状況について（ホームページより）

宮古島に持ち込まれた動物たち（宮古島市総合博物館発行）

6. お世話になった方々 宮古猟友会 宮古の農家の方々